

編集後記

高橋 敏

共同研究「在郷町の成立と展開―桐生新町の分析―」を立ち上げて八年、研究会が解散して五年が経過した。北関東の僻村から誕生した在郷町桐生新町を共同研究として多角的に取り組んだら近世から近代の移行期に何か見えて来るのでは、というのが素朴な発想であった。十一名のメンバー構成でフィールドワーク等動きやすい規模であった。

北に向かって桐生新町を貫く一本の幹線道路の両側に整然と区分された人工の丁々、そして家屋敷、繁華の町並みを散策しながら世紀を隔てた近世へ思いを馳せられる楽しいフィールドワークであった。

また、桐生市立図書館等の文書調査では、長沢家、書上家、吉田家等桐生新町を代表する町役人、絹仲買、織屋の家はもちろん町の総体にかかわる生の資料を手にとって読み、解読することが出来た。桐生新町の氏神、天満宮、浄土宗の名刹浄雲寺等の寺社、近代の歴史的建造物となつて残つた織物工場等、各自の問題関心からのフィールド調査の要求は区々で難しかった。

こうしたなか、現地唯一の研究者として参加をお願いし、勝手な要求を適切にさばいてくれたのが堀越靖久さんであった。堀越さんは桐生生まれの桐生っ子で、若き日から市役所に身を置きながら地域史研究に着実に実績を積み上げていた。名著の評価の高い『桐生市史』の編纂の裏方を担当して完成に漕ぎつける。

そして桐生市立図書館長に就任、市史編纂の過程で調査・閲覧した桐生新町にかかわる第一次資料の膨大な古文書の収集と、後世にのこす収蔵・整理の地味ではあるがかけがえのない仕事を継続された。私たち他所者が桐生新町の研究にストレートで取り組むことが出来たのは、何よ

りもきちつと整理されて閲覧を待つていた文書群が用意されていたからであった。土地勘のない、トンチンカンな疑問にも的確に対応され、見事に交通整理されて関連資料の所在を指示していただいた。それも堀越さんの顔の広さである。公務の傍ら市民の歴史学愛好者、郷土史研究者と語らつて桐生文化史談会をつくつて機関誌『桐生史苑』を編集・刊行もしていたのである。全員集合の夕食では酒が入つて侃々諤々桐生を肴に議論が弾んだ。いつも微笑を忘れず他所者のたわごとにつきあつてくれたのも堀越さんであった。堀越さんには「斗酒なお辞せず」の愛酒家の風があつた。平成八年三月、かくして三年の蜜月は終わつて、のこされたのは報告論文の執筆である。

私たちは、桐生には最高の現地案内堀越さんがいるから種々頼めばよいと安心しきつていた。平成八年某月のある日、堀越さんから分厚い郵便が届いた。御自身の責任分担としてまとめてみたので読んでおいてほしいとの短信が添えられていた。ワープロで丁寧に打たれた「近世期の桐生」と題した完全原稿であった。まだ誰一人として執筆していないし、原稿提出は気配すらなかった。

平成九年十月、突如堀越さんの訃報に接した。いつときではあるが桐生を失念していただだけに驚き、受領した「近世期の桐生」が堀越さんの遺稿となつたことを自覚した。

それから四年、重い宿題を負つたわりには長い歳月を浪費してしまい、堀越さんには申し訳ない仕儀となつた。堀越さんの慈顔を思い浮かべながら、追悼の念に駆られている。

また、横山伊徳さんには先行研究として私たちを導いてくれた氏の卒業論文を掲載することを快く認めていただいた。最後に本編の査読の労をとつてくださった方々にも不手際等あつたことを御詫びし、感謝の意を表したい。